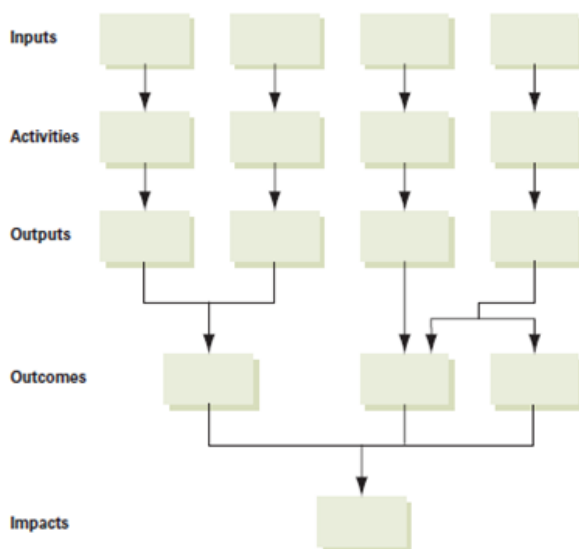


## 第1回連載 演習

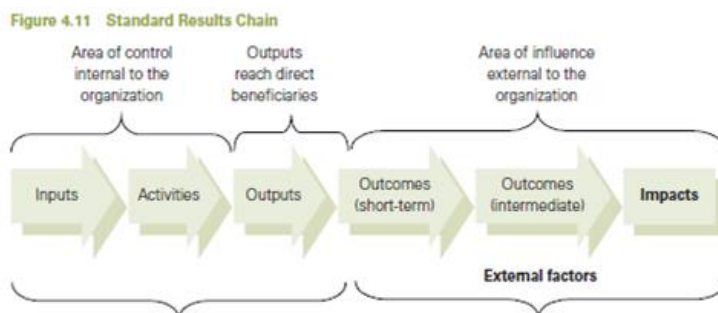
### 補足説明

連載の中でロジックモデルについて言及し、その具体的な例として図2を示した。政策目的を達成するための理論的仮説を「プログラムセオリー（≡Theory of change）」と呼ぶが、それを図の形で可視化したものが「ロジックモデル」である。ロジックモデルは図示化の仕方によって「Flow chart 型」や「Result chain 型」と呼ばれるような、いくつかの型がある。

Flow chart 型のロジックモデル



Result chain 型のロジックモデル



(出所) Imas and Rist (2008)

ロジックモデルは、原則インプット（政策に投じられた予算や人員等の資源）、アクティ

ビティ（インプットを用いて行う具体的な活動）、アウトプット（活動実績）、アウトカム（活動を通じて生じる社会の変化）から構成される。上記の例のように、アウトカムを初期・中間・最終アウトカムのように段階に分け、最終アウトカムのことをインパクトと別称することもある。

本文の図1に示したが、ロジックモデルは「政策形成時」につくられるものである。その際には、社会課題を踏まえ改善したいアウトカムを設定し、そのためにどのような活動やインプットが必要かという風にアウトカムを起点とした発想で考えていく。

ロジックモデルは、政策目的とその達成のための理論的仮説を明示化し、少なくとも理屈上は妥当性の高い政策を作り上げていくために使われるツールである。プログラムセオリー構築のための補助ツールといってもよい。したがって、政策の途中段階や終了後に、「この政策はどのようなプログラムセオリーだったのか？」という過去の理解を、ロジックモデルを用いて開始するということは通常はない。もちろん政策終了後に改めて、当初どのようなプログラムセオリーが想定されていたのかを再度確認するということはあるが、その時に初めてプログラムセオリーを意識するようでは、そもそもの政策形成プロセスに問題がある。

#### 演習の意図

以下では、すでに効果検証済みの事例を題材にして、政策目的に対して実際に行われた取組やインプットをロジックモデルに整理するという演習を行う。上記の通り、このような形でのロジックモデルの活用は本質ではない。本演習の意図は、「ロジックモデルの補助を得ながら行うプログラムセオリーの構築」を体験してもらうのではなく、「ロジックモデルによるプログラムセオリーの可視化」の部分に焦点を当て、ロジックモデルの構造になれてもらうことを意図したものである。

## 演習課題

公益財団法人チャンス・フォー・チルドレンは、東日本大震災後の被災地において「学校外教育バウチャー」事業を行っている。学校外教育バウチャーは、被災地の子どもたちの学力や進学率、非認知能力の形成を目的として実施されている事業である。バウチャーを事前に登録された施設であればどこでも利用することができ、学習塾・予備校・習い事等の費用に自由に使うことが可能である。バウチャーの金額は学年によって異なっているが、例えば受験を控える中学3年生や高校3年生の場合、年間で30万円となっている。

金銭的な支援に加えて、バウチャー受給者は「ブラザー・シスター」と呼ばれる大学生ボランティアからのアドバイスや進路相談等のカウンセリング支援を受けられる。チャンス・フォー・チルドレンは研修等によって、大学生ボランティアの育成を行っている。

この取組のプログラムセオリーを以下のような Result chain 型のロジックモデルの形に整理せよ。

なおこの取組は以下の論文ですでに効果検証されているものである。

The Effect of Shadow Education Vouchers after the Great East Japan Earthquake:  
Evidence from regression discontinuity design

<https://www.rieti.go.jp/jp/publications/nts/18e031.html>

ワークシート：Result chain 型のロジックモデル

インプット	アクティビティ	アウトプット	アウトカム